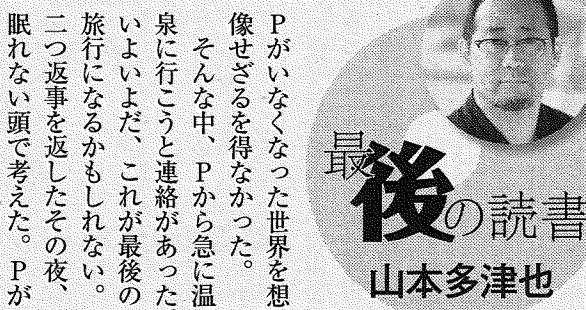


生き続ける親友

私は猫町倶楽部という読書会を主宰している。13年前にこの読書会を作るきっかけを与えてくれたのは大学時代からの親友のPという男で、Pとはかれこれ30年来の付き合いだ。そのPに昨年、肝臓癌が見つかった。癌は既にかなり進行しており、私はいやが応でも、Pがおり、もしPがこの世からいなくなつたとしてもやはり、私の生の中には依然としてPが生き続けるのではないか。生きている私の中にPはいる。私はPと一緒に生きている。今もこれからも。



人生の最後に読みたい本は何かと考えたとき、国木田独歩の『忘れえぬ人々』という短編が思い浮かんだ。無名の小説家がある晩旅先で偶然泊まり合わせた、これまで無名の画家と短い会話を交わす話だ。会話の中で小説家は、家族や友人、知人でさえない、忘れてし

いよいよだ、これが最後の旅行になるかもしれない。二つ返事を返したその夜、眠れない頭で考えた。Pがいなくなつた世界を想像せざるを得なかつた。

そんな中、Pから急に温泉に行こうと連絡があつた。

「われと他と何の相違があ

るか、みなこれこの生を天

るう。少なからずPという存在が、私の現在の一端を担つてゐると言える。といふことは私が生きる中に

私の中にPが生き続けるように、この世のすべての人もまた、大勢の他者と分かれがたく生きている。家名前も忘れてしまつた人や日々の中ですれ違つただけの名前も知らない人。彼らが私の中に生きているようになつても、私もまた彼らの中に生き続けるだろう。私は私が、同時に無数の他人であるのだ。

『忘れえぬ人々』は、いつ

かたつた一人この世を離れ、

新しい世界に旅立つ瞬間の孤独な心を、ほのかな灯りでそつと照らしてくれるだ

ろう。灯りの先にはきつと、

私と共に生き続ける、忘れ

まつても決して不義理にな

るわけでもないのになぜか

ずつと心に残つて、名前も知らない人たちに思い

を馳せる。

それ改めて確認した。

30年前に見た名レースの熱氣

マガジン虎

30年前に見た名レースの熱氣



岐阜の笠松競馬場から前年に移籍し、中央の強豪馬を圧倒したオグリの走りは日本人の

判官びいきを刺激し、空前の競馬ブームが起きた。スター豪馬には練習が侍構えていた。馬主の事情で転売され、そのとき高額の売却金が発生した。この秋、オグリは過酷な連闘を強いられた。ファンには、高額なトレード金を回収するためのロードアイムにより、日本競馬の頂点に立つ4歳牝馬アーモンドアイに焦点を当てる。

令和元年、秋の主役を冒頭で紹介した後に、30年前の平成元年を振り返る。秋の名レースが紹介される。天皇賞（秋）、エリザベス女王杯、マイルチャンピオンシップ、ジャパンカップの4戦だ。

30年といえば、すいぶん昔だ。なのに、どのレースも結果だけではなく、観客が発散する熱気まで覚えてる。主観客は酔い、2頭を称えた。

あの年の秋に、彼の走りを見たから、私たち30年も競馬を観戦し馬券を買った。それを改めて確認した。

30年といえ、すいぶん昔だ。なのに、どのレースも結果だけではなく、観客が発散する熱気まで覚えてる。主役はオグリキャップだ（牝馬限定のエリザベス女王杯）。

かめわだ・たけし=1949年生まれ。作家・コラムニスト。著書に『60年代ボップ少年』『黄金のテレビデイズ』など。最新刊は『雑誌に育てられた少年』です。